

なちちよう昔ばなし

あまんじやこ

①

むかしむかし、いまの明石のあたりに、あまんじやこという大男がおつての。  
なんでも、南の島で生まれたとかで、それはそれは大男じやったそうなの。

そのころは、空がいまよりずっと低くかつたんで、雲に頭がつかえて、往生  
しとったそうなの。あまんじやこは、ひまさえあれば、よっこらしよと雲をもち  
あげ、おいしい空気を吸っていたんじやよ。

①

ある日のこと、あまんじゃこは退屈して、大きなあくびをした拍子に、ひよ  
いと北の海が見たくなって。

②

いったんそう思うと、まったのないあまんじゃこ、もう行きとって、行きと  
うて、どうにも辛抱できんようになってしまった。

「ようし、行ってみるとするか」

そう言ってあまんじゃこは歩きだしたんじゃが、頭がつかえての。腰を曲げ  
て歩かんといかんかったんで、もう腰が痛とって、痛とって、なんぎしとった  
そうな。

ところが、中町まで来たところ、ありや不思議、急に空が高くなったそう  
な。

③ 「おやおや、ここは高いぞ。 たかじゃ。 高いのう、高いのう」

あまんじゃこは、もう嬉しくて嬉しくて、腰の痛みも忘れて、思わずガッツ  
ポーズしたそう。

それからというもの、このへんを「たか」と呼ぶようになったんじゃ。  
ねえ、みんな、うーんと手をのばしてみたらん。空に手がとどくかいな。

なに、とどかない？ ふーむ、するとここは、やっぱり「たか」じゃのう。

④

あまんじゃこは、すっかり面白うなって、ためしに妙見山のとっぺんに立って見たそう。それでも頭がつかえんで、すいすいと涼しい風が吹いていたということじゃ。

手をかざして、北を見たり、南をみたりしておったが、あまんじゃこは、とあることに気がついたんじゃ。みんな、なんじゃか分かるかな。

「ふむふむ、ほうほう、ここは、日本のまん中じゃ」

「あれまあ、中の里じゃないか。なるほど、ここが日本のまん中かいな」

あまんじゃこは、もうすっかり感心して、きよろきよろと、いつまでも見まわしていたそう。

⑤ 「ここは、ほんによいとこじゃ。中の里で、ちよっくら<sup>葎</sup>一服して行くことにするか」 そう言うて、ごろんと横になったそうなの。

このあまんじゃこ、なかなかの変わりもんで、誰かが「白」と言うたら、必ず「黒」と言うて聞かんかったそうなの。

人が昼働<sup>カ</sup>らくんで、自分は寝ることにしての。人が寝る夜さりに、起きることにしたというわけじゃ。みんなの中に、人の反対ばかりするもんがおったら、あまんじゃこの親類かも知れんよ。

いつも夕方になると、あまんじゃこのゴロゴロといういびきで、人々はえろ<sup>う</sup>迷惑したそうなの。

あまんじゃこはまた、めっぼういたずら好きで、人をびっくりさせんのが、  
楽しみじゃったそうな。

⑥

ある晩、ふいと、中町の妙見山と、八千代の笠形山の間には大きな橋をかける  
ことを思いついての。せっせと石を積みはじめたんじゃ。なにしろ、一度に両  
手を使うんで、石はすぐ積めたそうな。

けど、山から山へ渡す木がのうて、方々探しまわったんや。中の里はもちろ  
ん、黒田の庄から野間の里まで探しても、あかんかったわけでの。

とうとう杉原の奥の山に、大きな杉の木があつて、それを使うことにしたぞうな。

ところがじゃ、ここで思いがけないことが起こったんじゃ。

「コケコッコウー」と、突然にわとりが鳴いての、夜が明けかけたんじゃ。

「わあー、もう朝じゃ。寝るじかんじゃ」

あまんじゃこは、ぼーんと杉の丸太を放りなげると、すたこらさ、山のかげへ行つて、寝てしもうた。

それで、とうとう橋がかからんで、石垣だけが残つたというわけじゃ。こんど、妙見山に登ったら、あまんじゃこのつんだ石垣を見ることじゃな。

⑧

あまんじゃこのいたずらは、これだけじゃあらしません。

次は、中学校うらの丘山と、茂利の太子山を、一晩のうちにどけての。人を  
びっくりさせようとたくらんだのじゃ。

長い石の棒を天秤にして、よっこらさ、山を持ちあげようとしたんやけど、  
そこは山じゃ。びくともせんかった。

「ウーン。よいこらどっこい」とばかりに力をいれると、ボキーンと石の棒が  
おれての。またまた失敗したんじゃ。

奥中の信号のあたりに、天秤にして折れた、あまんじゃこの長石があるから  
調べてみることにじゃな。



こんないたずらもんのあまんじゃこにも、もちろん、よいところはあった。

それは、こわい顔に似合わず、とっても心がやさしゅうての。いじめられて  
いる子を見れば、放っとけんかったそうや。

いじめっこを見つけたすと、もう怒っての、ぎゅうっと首すじをつまみ上げ  
杉原川の稚児が淵へ、ポーンと投げ捨てたそうや。

それで、あまんじゃこは子どもに、とっても人気があったのじゃ。

みんなの中に、いじめっこはおらんかの。

このあまんじゃこ、耳がよう聞こえての。人がこそこそ話しをしようと、ちやんと聞いとったんじゃ。

「のう、じんべいさんや。この山がなかったら、米がようけ作れるのにのう」

「せやのう、たろべえさん。なんぼ親切なあまんじゃこでも、よおせえへんやろのう」

「・・・ふんにや、誰かがわしのことを、噂しとるな。フッフフ、わしにでけんことは何もないんじゃぞ」

それでもってあまんじゃこは、今度は慎重に山をどけて、一晚のうちに多くの田んぼを作ったそうな。

「なあ、じんべいさんや。田んぼが広うなっても、くわや鎌ないど、どうにもならんろう」

「せやかて、たろべえさん。いくらあまんじゃこでも、こればかりはできま  
いぜ」

「ほんに、困ったことやのう」

「へっへっへっ、なに言うてるんじやい。このわしに、できんことなんか  
ないんじや。ま、ちよっと待つたらんかい」

そう言ったかと思うと、あまんじゃこはどこからか鍛冶屋さん連れて来て、  
中の里に住ませたのじゃ。それからというものは、トッテン、カッテン、カ  
ン、カーンという音が、そこやかしこから聞こえたそうなの。

村人たちは、たいそう喜んで、酒好きのあまんじゃこのために、いっぱい酒  
を作ってやってのう。中の里は、おいしい酒どころとしても、有名になったん  
じゃよ。みんな、山田錦って聞いたことないかのう。よい酒米なんじやが。

⑫

こんなことがあつたりして、あまんじゃこと村人は、だんだん仲よしになつたんじゃが、えらいことになつてしもうての。

中の里に、白いもんがチラリチラリと降りはじめたころや。あまんじゃこは北の方へ行くとちゆうだったことを思いだしたんじゃよ。

「もっと、中の里におればよいがな。子どもも喜ぶさかいのう」

「ほんまや。北の国は寒いよつてに、春まで待つたらどうじゃ」

みんな、口々に言ったんやが、人の反対ばかりするのが、あまんじゃこでの。寒さの大きらいなあまんじゃこは、ポロポロ涙をこぼしながら、中の里をでていったそうな。

このときの涙は、小さな川になつて、中の里を流れだしたのじゃ。

村人は、その川を「思い出川」と名づけて、いつまでも、いつまでもあまんじゃこを忘れないようにしたそうな。

1914